

住友化学、 変革のサウジアラビアと ラービグ・プロジェクト

住友化学株式会社
石油化学業務室 部長
栗原 仁



変わりつつあるサウジアラビア

サウジアラビアは、人口約3000万人（外国人労働者を含む）、世界第2位の原油確認埋蔵量、イスラム教の聖地メッカとメディーナを擁する中東の大国である。

かつてサウジアラビアの意思決定は、「均衡とコンセンサスの伝統」に基づき慎重かつ時間をかけて行われてきたといわれている。ところが昨年1月にサルマン国王が即位してから、その伝統の意味合いが変容してきているのかもしれない。就任直後から数度にわたり大幅な行政組織改編・人事異動を行い、息子のムハマド・ビン・サルマン副皇太子に大幅な権限を集中させ、さまざまな改革案を提言させてきた。本年4月下旬にはVision 2030（石油依存型経済から脱却、投資や観光、製造業、物流など経済の多角化、民間企業の役割拡大による雇用創出を図り、国民の生活水準を向上させることを目指した2030年までの経済計画）を、6月上旬にはその具体策である2020年までの省庁ごとの目標を列挙した国家変容プログラムを発表した。実現が容易ではない事項も含まれるが、サウジアラビアの中長期的発展に必要なものと思われる。一方、王族内の意見統一、税導入による一般国民の負担増大、官僚機構による抵抗

なども予想され、国民の意識改革も必要と思われるため、国王、副皇太子の強力なリーダーシップによりどのように実行されていくかを注視していく必要があるだろう。変容していくサウジアラビアからは当面目が離せない。

ラービグ・プロジェクト

日本企業のサウジアラビア石油化学分野への進出においては、1970年代後半から80年代初めに設立されたアルラジ、シャルクなどが先駆けである。そのころより、住友化学はシンガポールで石油化学事業を展開、現在も拡張を続けているが、2000年代初頭になって、サウジアラビア産業多様化政策の一環として同国西岸に位置するラービグでの石油精製・石油化学統合コンプレックス新設案件の入札が行われ、住友化学がサウジ・アラムコ社（アラムコ）のパートナーに選ばれサウジアラビアに進出することとなった。その後、合弁契約の交渉などを経て05年にアラムコとの合弁会社（ペトロ・ラービグ社）を設立、09年から生産を開始している。

ペトロ・ラービグ社の工場は東京都中央区の約2倍の広さがあり、ジェッダから約150km北に位置する。ジェッダ空港から車で1時間半強、車窓越しにサッカー競技場、敷設中の鉄道、キング・アブドゥラー・エコノミック・シティーなどを眺めていると、やがて、左手遠方に工場群が見えてくる。ラービグ・プロジェクトはこの種のプロジェクトとしては世界最大級の規模で、既存の第1期計画では総事業費約100億ドルをかけ、日量40万バレルの原油および日量9500万立方フィートのエタンを主原料としてガソリン、ナフサ、軽油などの石油製品およびポリエチレン、ポリプロピレンなどの石油化学製品を製造している。

工場近郊にペトロ・ラービグ社の従業員が居住するコンパウンドがあり、小さいスーパーマーケット、食堂、レクリエーション施設、診療所、訪問者向け宿泊



日本人シェフが駐在する和食レストラン

施設、現地人用の学校、モスクなどが揃っている。検閲があるので種類は限られてはいるが、図書館には日本語の新聞、書籍、DVDなども置いてある。また、「桜亭」という日本食レストラン（日本人シェフが駐在）もあり、住友化学からの出向者にとっては数少ない憩いの場となっている（写真）。

第2期計画

現在、第1期計画に加えて、エタンクラッカーの増設、芳香族プラントを新設し付加価値の高いさまざまな石油化学製品を製造する第2期計画の工事が進行中である。これは日量3000万立方フィートの追加エタンおよび第1期計画から産出されるナフサを主原料に、パラキシレン、ベンゼンをはじめ、さらには自動車用部材などに使用されるより付加価値の高い石油化学製品を製造するものである。第2期計画では、当社ほかの最新の技術を導入し、第1期計画との相乗効果を追求するとともに、サウジアラビアでのより一層の雇用拡大および製品の高付加価値化による産業多様化に寄与することを狙っている。

第2期計画の総事業費約80億ドルに関する資金調達は、両社と一般株主出資のほか、第1期計画と同様、銀行団からプロジェクト・ファイナンスの供与を受けている。同一の借入人に対して、第1期計画と第2期計画のレンダー間のコンフリクトを避けるため、なるべく同じ参加銀行となるよう組成した。本件、日サの共同事業（出資比率：住友化学・アラムコ各37.5%、一般株主25%）で、サウジアラビア国内を除き両親会社が製品を販売するほか、ファイナンスについても日サ銀行が中心となっている。両国の政府系金融機関である国際協力銀行およびサウジアラビアのPublic Investment Fundをアンカー・レ

ンダーとして頼み、主要邦銀各行、サウジ地場銀行、欧米の銀行を加えて融資組成を行い、ファイナンシャル・アドバイザーは三井住友銀行にお願いした。昨年3月にファイナンシャル・クローズをしたがそれまでに、停電や初期の安定しない操業などの影響を受け、かつ拡張プロジェクトに伴う複雑なストラクチャーもあり、いくつかのハードルを越えなければならなかった。一方、プロジェクト・ファイナンスの特徴でもあるが、銀行、各種コンサルタントをはじめとした第三者の目を通じたデューデリジェンスにより、結果的にはより強固なストラクチャーとなったと考えている。

なお、住友化学が銀行団に供与している完工保証のうち相当額についてNEXIの貿易保険により非常危険がカバーされている。

最後に

サウジアラビアと日本では、気候、宗教上の制約といった歴史や文化などの相異に加え、巨大石化事業は複雑な製品構成をもつため、日々さまざまな問題が生じてくるので、関係者間での意思決定に思いのほか時間がかかる。サウジアラビア国内外で取り巻く環境も刻々と変化しているが、日本の原油輸入の必要性、サウジアラビアの外国からの投資、技術導入による産業多様化の要求という構図は短期的に変わるものではない。例えば、アラムコとの合弁事業に限っても、仏のトータル、米のダウ、中国のシノベックが相次いで巨大プロジェクトに参入している。

灼熱の太陽の下、現地の環境は厳しく、日本人とサウジ人の仕事の進め方も異なるが、それをうまくミックスすることによりグッド・ケミストリーを生み出していきたい。



ラービグのエチレンプラント全景